

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12481

研究課題名（和文）関係人口と地域住民との価値共創から検証するツーリズム・テロワール価値概念の有効性

研究課題名（英文）Validity of the Tourism Terroir Concept from the Perspective of the Population Concerned

研究代表者

藤田 武弘（FUJITA, TAKEHIRO）

追手門学院大学・地域創造学部・教授

研究者番号：70244663

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「関係人口」を4つの類型（参加・交流型、反復・就労型、直接寄与型、地域資源活用型）に区分し、関係人口と地域住民との多様な価値共創の実態を考察した。具体的には、地域における新たな雇用創出や自治体の税収増加に繋がっているかどうかを指標として分析し、得られた結論は次のとおりである。

各類型ともに多様な形で価値共創を実現していること、そのためには地域資源を日常不断に維持管理することが必要であり、将来の移住を目標とする農的関係人口の構築が重要であること、それらの効果を地域内外に向けて可視化する手法としての学習機会の創出が必要であること。

研究成果の学術的意義や社会的意義

テロワール概念を援用した研究は「観光学」「農業経済学」「文化政策学」の各領域で取り込まれたばかりで、地域産業クラスターの展開や地域活性化への寄与についての指摘はあるが、それに伴う地域内での雇用創出や当該自治体における税収の増加などを具体的に検証した研究は見当たらない。

本研究は、近年農山村地域における新たな価値共創の主体として関心を集める「関係人口」に注目し、地域住民との繋がり方によって交流の「鏡効果」や再投資のあり方に如何なる差異が生じるのかを実証的に明らかにするとともに、ツーリズム・テロワール概念の有効性を検証しようとする点に学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study classified the "related population" into four types (participation/exchange, repetition/work, direct contribution, and utilization of local resources), and examined the actual situation of diverse value co-creation between the related population and local residents.

Specifically, the following conclusions were obtained by analyzing whether or not the project is linked to the creation of new jobs and increased tax revenue for local governments in the region as an indicator. (1) Each type of project has realized value co-creation in a variety of ways. (2) To achieve this, it is necessary to constantly maintain and manage local resources on a daily basis, and it is important to build an agriculturally related population with the goal of migrating in the future. (3) It is necessary to create learning opportunities as a method to visualize those effects inside and outside the region.

研究分野：農業経済学

キーワード：関係人口 テロワール ツーリズム 地域内再投資 地方創生

## 1. 研究開始当初の背景

元来、テロワール(仏: Terroire)は、「ワイン畑に固有の生産力を規定する自然条件を意味する土壌の肥沃度や気候風土、さらには栽培・醸造技術等の人為的条件を含む産地やワイナリーを対象とする総合的な価値概念」とされているが、近年では、原産地呼称保護や地理的表示保護等のフランスの厳格な食品表示制度に裏付けられた「地域産業振興方策」としての視点について日本国内でも関心が高まりつつある。一方、観光学領域においても、マスツーリズムからのパラダイムシフトを経て、地域資源活用型の文化・産業体験やヒトとの交流を特徴とする「着地型観光」がオルタナティブツーリズムとして注目を集めている。

それら二つの概念を統合的に論じたのが、農業経済学(フードシステム論)領域における小田滋晃ほかの研究である。小田ほかによれば「ツーリズム・テロワール」は、フランスのワイン産業の活性化方策を具体化するための理論的根拠を与える基礎概念として研究・普及領域において注目を集めつつある考え方で、グローバル市場において競争力に劣る地域特産物などの地域資源に固有の価値を認め、消費者に対する訴求力を高める必要から導入が進んでいると整理されている。そして、この考え方はワイン産業のみならず応用性の高い概念として再構築することによって、フードシステムにおける地域産業クラスターの展開・発展に結びつける可能性を持つと指摘している【小田ほか 2008】。

また、文化政策学領域では、児玉徹が、日本産ブドウのみを使用して国内で醸造した日本産ワインに注目し、テロワールを基盤とした産地ブランドの確立によって、当該地域で生産されるワインの競争力強化に資すると同時に、産業クラスターの発展やワインツーリズム等の派生産業の創出にも繋がる可能性を持つことを指摘している【児玉 2018】。

このように、フランスのテロワール概念を援用した研究は端緒的であり、上述した研究において地域産業クラスターの展開や地域活性化への寄与について指摘したことの意義は認められるものの、ワイン産業以外の産業クラスターにおける展開可能性に関する実証的分析や考察は行われていない。さらには、地域住民との交流・連携・協働を通じた「鏡効果(日常生活に潜む地域資源の価値への気づき)」の発揮が期待されるなど農山村における価値共創の担い手として注目を集める「関係人口(地縁・血縁先の訪問を除き、日常生活圏・通勤圏等以外の特定地域を定期的・継続的に訪問する人)」に着目し、そのタイプや行動が地域内再投資のあり方に如何なる影響を与えるのかという視点からツーリズム・テロワール概念の有効性を論じようとしたものは管見する限り見受けられない。

【参考文献一覧(参照順)】

○小田滋晃ほか「アグリ・フードビジネスとツーリズム・テロワール:新ネットワーク論に基づく地域産業クラスター研究の今日的課題」『生物資源経済研究』13、pp.89-110、2008年。

○児玉徹「日本ワインを軸とした日本のワイン産業の推進戦略」『季刊 国際貿易と投資』113号、pp.142-158、2018年。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近年の地方創生事業(第2期「まち・ひと・しごと総合戦略」令和2年度~)の中で農山村活性化の新たな担い手として注目を集めるとともに、地域住民との交流・連携・協働を通じた「鏡効果(日常生活に潜む地域資源の価値への気づき)」の発揮が期待される関係人口のタイプと活動に着目し、関係人口と地域住民との交流を通じて進展する多様な「価値共創(鏡効果の発揮による地域資源のブラッシュアップ、農業・農村の商品化)」の実態を解明するとともに、それらの動きが地域内雇用の創出や税収確保等の面で効果が期待される地域内再投資力にどう帰結するのかを分析・考察することによって、地域資源の価値を消費者に訴求する際の考え方として注目を集めるツーリズム・テロワールの価値概念がもつ有効性を検証することである。

研究の学術的独自性は、近年の消費トレンドの変化(モノ消費からコト消費へ)を背景として着地型観光に期待される「物語性」という評価視点を、ツーリズム・テロワールの価値概念を適用して高次化することによって、地域内経済主体間の連関性がより一層明示的となり、さらには地域産業クラスターへの展開など派生産業の創出(地域循環型の6次産業化構築)を通じた「地域内再投資力(地域内雇用の創出や自治体の担税力拡充に帰結)」の向上を促すことが期待される点である。

また、学術的創造性については、本研究の遂行を通じて、観光学領域における着地型観光(地域資源の発掘・利活用の促進)の有効性や現代的意義に関する研究に対して、地域活性化の指標となる、より具体的なエビデンスを提供できる。さらには、農業経済学(フードシステム論)領域における産業クラスター研究を深化させることにも貢献できると考えている。

### 3. 研究の方法

研究の分析課題ごとにみた分析対象・事例地域と研究方法、課題分担状況と年度別研究計画（タイムテーブル）は次の通り。

○分析課題：タイプ別「関係人口」の全国動向ならびに事例地域での活動実態の把握

分析対象と方法：関係人口（訪問系）に関する政府分類を手掛かりに、関係人口をA「地域おこし協力隊（直接寄与型）」、B「ワーキングホリデー反復参加者（就労型）」、C「棚田保全活動参加者（参加・交流型）」、D「農家レストラン等反復利用者（趣味・消費型）」の4タイプに区分し全国動向を把握するとともに、各タイプごとに設定した分析事例地において、関係人口の参加動機・地域住民との関わり状況等に関するヒアリングとアンケート調査を実施する。

○分析課題：関係人口と地域住民との「価値共創」実態把握と地域内経済連関の検出

分析対象と方法：分析課題の事例地ごとに「価値共創」と関連して派生する経済連関（A：起業・継業に伴う新たな産業創出・地域づくりプロジェクト等の企画・運営に伴う雇用創出状況／B：労働力節減効果・産品購入など事後的経済効果／C：交流イベント等集客効果・地域住民の参画状況／D：地元食材調達等の経済効果・利用者の回遊行動に伴う経済波及効果）に関するヒアリングとアンケート調査を実施する。

○分析課題：地域内再投資力からみたツーリズム・テロワール価値概念の有効性検証

分析対象と方法：分析課題で検出された経済連関が、地域産業クラスターとして持続的に展開する可能性、新たな雇用創出に伴う自治体税収確保や関係人口創出に伴う経済波及効果の有無を関連企業・団体並びに自治体部局からのデータ収集とヒアリングを通じて分析・検討し「地域内再投資力」のレベルを指標化するとともに、ツーリズム・テロワールの価値概念としての有効性について総合的視点（自然的条件・人為的条件・社会経済的連関性）から考察する。

### 4. 研究成果

本研究では、近年の地方創生事業において注目を集めている「関係人口」をその創出目的に照らして、参加・交流型（棚田保全活動）、反復・就労型（農村ワーキングホリデー・援農活動）、直接寄与型（地域おこし協力隊の実施事業）、地域資源活用型（農家レストランにおける食材調達行動）の4つに区分した上で、関係人口と地域住民との多様な「価値共創」実態（交流の「鏡効果」による地域資源のブラッシュアップ、農業・農村の商品化など）に着目し、それらの動きが地域内雇用の創出や当該自治体の税収確保などの「地域内再投資」に繋がっているのかを考察した。

その結果、各タイプの「関係人口」はそれぞれに地域住民との間での多様な「価値共創（棚田保全活動におけるリピーターの確保、農村ワーキングホリデー参加者における農業労働力補完機能、地域おこし協力隊卒隊者における起業・創業動向、農家レストラン・宿坊における地域食材活用の拡がり）」を実現していた、さらに地域資源を日常不断に維持管理し、地域内雇用の創出や自治体税収の確保などの成果に帰結するためには、地域社会のコミュニティと深く関わりを有することが必要であり、将来の移住・定住を目標に据えた「関係人口（農的「関係人口」とも同義）」の創出が重要であること、さらにはそれらの効果を地域住民や自治体、さらには外部アクターに対して「可視化」するための学習機会の確保が極めて有効であること等が明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 貫田理紗・藤田武弘	4. 巻 95-4
2. 論文標題 農村ワーキングホリデーにおけるリピーター労働力の貢献度に関する考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 農業経済研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井至・稲葉修武・藤田武弘	4. 巻 95-4
2. 論文標題 コロナ禍における農業体験農園の取組状況と今後の課題	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 農業経済研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 八島雄士	4. 巻 10
2. 論文標題 組織間連携を促進する創意工夫の探求	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 余暇ツーリズム学会誌	6. 最初と最後の頁 111,116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田武弘	4. 巻 4
2. 論文標題 食農連関の再構築と都市農村交流への期待	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福田晋・藤田武弘編著『食と農の変貌と食料供給産業』（筑波書房）第3章所収	6. 最初と最後の頁 53,72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今西陽子・藤田武弘	4. 巻 32-1
2. 論文標題 ローカルフードを活用したガストロノミーツーリズムの現代的意義に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 農業市場研究	6. 最初と最後の頁 74,81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 草川克子・八島雄士	4. 巻 9
2. 論文標題 域学連携の再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 余暇ツーリズム学会誌	6. 最初と最後の頁 73,81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸上光克	4. 巻 31-3
2. 論文標題 食料・農産物市場の現代の変容と農業市場研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 農業市場研究	6. 最初と最後の頁 30,37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 八島雄士・井出吉成佳・岩橋克彦	4. 巻 26
2. 論文標題 環境変化に対応する道の駅運営の現状と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域経済	6. 最初と最後の頁 9,19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田武弘	4. 巻 1月号
2. 論文標題 都市農業振興に向けた産官学連携の試み - 和歌山市を事例に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 農村と都市をむすぶ	6. 最初と最後の頁 41,49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八島雄士、佐々木壮太郎	4. 巻 23
2. 論文標題 観光教育の質向上への挑戦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 観光学	6. 最初と最後の頁 127,133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸上光克	4. 巻 1
2. 論文標題 農村における地域連携活動の現状と課題に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和歌山大学Kii-Plusジャーナル	6. 最初と最後の頁 19,24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤井至	4. 巻 7月号
2. 論文標題 地域との関係性が地方創生につながる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 AFCフォーラム	6. 最初と最後の頁 7,10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 貫田理紗・藤田武弘
2. 発表標題 農村ワーキングホリデーにおけるリピーター労働力の貢献度に関する考察
3. 学会等名 日本農業経済学会（アジア農業経済学会と共催）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井至・稲葉修武・藤田武弘
2. 発表標題 コロナ禍における農業体験農園の取組状況と今後の課題
3. 学会等名 日本農業経済学会（アジア農業経済学会と共催）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八島雄士
2. 発表標題 組織間連携を促進する創意工夫と課題
3. 学会等名 余暇ツーリズム学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浦円香、大浦由美、藤田武弘
2. 発表標題 棚田保全活動にみる都市農村交流活動の意識に関する一考察
3. 学会等名 日本農業市場学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 貫田理紗、有田昭一郎、東良太、藤田武弘
2. 発表標題 農業・農村の担い手確保における農山漁村での経験値要因の検討
3. 学会等名 日本農業市場学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 草川克子、八島雄士
2. 発表標題 域学連携における地域側と大学側のニーズのマッチング
3. 学会等名 余暇ツーリズム学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神野直幸、八島雄士
2. 発表標題 分散型観光推進における地域主体の観光地ブランディングの重要性
3. 学会等名 余暇ツーリズム学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 福田晋・藤田武弘	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑波書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 食と農の変貌と食料供給産業	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	八島 雄士 (Yashima Yuji) (00320127)	和歌山大学・観光学部・教授  (14701)	
研究分担者	大浦 由美 (Oura Yumi) (80252279)	和歌山大学・観光学部・教授  (14701)	
研究分担者	岸上 光克 (Kishigami Mitsuyoshi) (20708002)	和歌山大学・食農総合研究教育センター・教授  (14701)	
研究分担者	藤井 至 (Fujii Itaru) (30832703)	大阪商業大学・経済学部・講師  (34410)	
研究分担者	貫田 理紗 (Nukita Risa) (00840050)	島根県中山間地域研究センター・地域研究スタッフ・主任研究員  (85203)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関